

# 国際レベルの女子ハンドボール競技におけるバックコートプレーヤーの ポストプレーヤーへのアシストパスプレーに関する研究

武田 ひかり (201211902、ハンドボールコーチング論)

指導教員：會田 宏、藤本 元、山田 永子

キーワード：ポストプレー、上位チーム、有効プレー

## 【目的】

本研究では、世界女子ハンドボール選手権大会に出場したチームを対象に、バックコートプレーヤーのポストプレーヤーへのアシストパスプレーの特徴を明らかにし、今後の指導に役立つ知見を得ることを目的とする。

## 【方法】

本研究では、第21回世界女子ハンドボール選手権大会20試合361シーンを研究対象とした試合映像が記録されたDVDを再生して、バックコートプレーヤーのポストプレーヤーへのアシストパスプレーの場面を抽出し、①パス結果、②プレー結果、③プレー成否、④ディフェンス状況、⑤ディフェンスの接触、⑥バックコートプレーヤーのポジション、⑦バックコートプレーヤーの高さ、⑧バックコートプレーヤーの顔の向き、⑨バックコートプレーヤーのスウィング動作、⑩パスの種類、⑪バックコートプレーヤーのステップパターン、⑫バックコートプレーヤーとポストプレーヤーとの位置関係、について分析した。分析項目を上位4チームとその他のチームで比較するために、T検定、カイ2乗検定および残差分析を用いた。

## 【結果】

1. 上位チームはアシストパスが成功してアシストパスが成功してシュート達成する有効である割合が高かった。またオフェンシブなディフェンスに対して、9m以上の高さから、ポストプレーヤーを見て、ジャンプでアシストパスをすることが多かった。バックコートプレーヤーとポストプレーヤーは、逆方向に動くことが多かった。  
2. その他のチームは、アシストパスが失敗したり、ミスにつながったりするなどの有効でないプレーの割合が高かった。またディフェンシブなディフェンスに対して、6~9mから、ポストプレーヤーを見ないで、利き手に側に1歩踏み出してアシストパスすることが多かった。ポストプレーヤーだけが動くプレーとバックコートプレー

ヤーとポストプレーヤーの両方が同じ方向に動くプレーが多かった。

表1 チーム別のプレー結果

	上位チーム	その他のチーム
シュート達成	64(40.8%)#	58(28.4%)*
7m スロー/警告	25(15.9%)	34(16.7%)
フリースロー	36(22.9%)	46(22.5%)
ミス	29(18.5%)*	60(29.5%)#
その他	3(1.9%)	6(2.9%)
合計	157(100%)	204(100%)

カイ2乗値=8.714,  $p < 0.05$

#残差分析の結果,有意に大きい

\*残差分析の結果,有意に小さい

## 【考察】

上位チームはバックコートプレーヤーのシュート力の高さを背景に最初はシュートを狙いディフェンスを引き寄せ、ポストプレーヤーが動けるスペースを作り、ポストプレーヤーを見て状況を把握し、シュート達成できるかどうか判断してアシストパスしていると考えられる。

その他のチームはディフェンスに近づいてポストプレーヤーの動くスペースをなくしてしまったり、ポストプレーヤーを見ないで適切に状況判断せずにアシストパスをしたりしていたため、有効でないプレーの割合が多かったと考えられる。ポストプレーヤーだけが動いたり、バックコートプレーヤーとポストプレーヤーの両方が同じ方向に動いたりすることで、ディフェンスに読まれてミスに繋がるが多かったと考えられる。

## 【実践現場への提言】

ポストプレーヤーへのアシストパスを有効に行うためには、バックコートプレーヤーのシュート力、状況判断能力、パス技術とポストプレーヤーのキャッチ技術、1対1の突破力、位置取り能力を強化する必要があると考えられる。